伊藤左千夫と三井甲之　その二

―その接近と対立―

貞光　威

明治四一年一月一〇日、「馬酔木」第四巻第三号（終刊号）がようやく刊行された。第二号が出たのは前の年の五月二五日であったから、それから七か月もたっている。

この終刊号の発行日について、表紙の右上に、「明治四十一年一月一日発行」とあり、裏表紙の左上にも同様に印刷されているが、奥付には「一月七日印刷　一月十日発行」とある。「一月十日発行」が正しいと考えられる。一月一日に発行の予定で表紙は印刷したが、間にあわず、実際の発行は一月一〇日になったものであろう。

左千夫は明治四一年一二月四日付の篠原円太宛八六四書簡で

馬酔木ハ年内に覚束なく相成候原稿ハ遠に印刷屋へ廻り居候ても暮の事故思ふ様ニやつてくれす候小生も謝罪許りでハやりきれ不申候

と述べ、また同じ日付の胡桃沢勘内宛八六五書簡でも同じ趣旨のことを言っている。

このように七か月もかかって雑誌が出るという刊行の遅れは、左千夫は、もともと搾乳・牛乳販売という多忙な仕事を持っていた上に、新聞「日本」の選歌も担当し、その上にこの頃から小説や写生文の執筆に力を入れるようになって、機関誌の編集に十分の時間を費やすことが難しくなっていた。これが、「馬酔木」の発行遅延の大きな理由であるが、その上に、明治四〇年八月下旬から九月の上旬にかけて大水害に見舞われたことが、もっと大きく影響していると考えられる。

この水害について、左千夫は、短歌「水籠十首」を詠み、写生文「水籠」を書いている。それによれば、八月二六日、朝から洪水となり、浸水は床上二尺（六〇センチ）に及んだ。子供のうちで年齢の高い者と牛は、家から七、八丁（七、八〇〇メートル）離れた場

所に避難させ、左千夫夫婦に幼い子供三人と、女中は、四畳の仮の床を作り、そこに籠もった。水がようやく引きはじめたのは九月三日で、避難していた家族と牛は、この日、家に連れもどすことができた。しかし、床に畳が敷けるようになるのはずっと先のことで、一〇月一〇日になって、ようやく一間だけ畳が敷けたと、一一日付の胡桃沢勘内宛八四〇書簡で知らせている。また、こんな状態では執筆や、雑誌の編集などは無理で、一〇月になって、左千夫はすこし離れたところにある平井村の灯明寺という寺院に部屋を借りて、そこへ通って仕事をしている。この洪水で、長塚節の写生文「佐渡が島」など「馬酔木」の原稿の一部に水がついてしまった模様である。この長塚節の写生文「佐渡が島」は、「馬酔木」の発行の目処がたたないので、「ホトトギス」に回されて、一一月一日発行の一一巻二号に発表された。

なお、一一月二日、左千夫は朝日新聞社を訪問し、「馬酔木」同人たちの短歌を新聞に掲載するように交渉している。朝日新聞社からは、新聞「日本」ほどには短歌に紙面を割くのは当分難しいと言われたが、掲載の承諾は得られたようで、長塚節、望月光、篠原志都児、蕨真らにその経緯を報告し、朝日新聞のための歌稿を送るように依頼している。これは、洪水などのために、「馬酔木」第四巻第三号の刊行がいつになるか、その見込みがつかなくなったための措置であろう。

このような事情で、「馬酔木」第四巻第三号（終刊号）は遅れに遅れて、明治四一年一月一〇日になって、ようやく刊行を見た。

この号で左千夫が筆をとっているのは、

大御世をたゝへまつりてよめる歌（長歌一首・反歌三首）
四壁小言
篠原志都児の「竹の里人六週忌」につけた付言
「馬酔木」終刊之消息
稟告

の五点である。なお、三井甲之はこの号には作品を載せていない。「アカネ」発行の準備に没頭していたものと思われる。

左千夫が終刊号の第一ページに載せた、「大御世をたゝへまつりてよめる歌」は、反歌の第二首に「秋山の霜葉の色のおごそかに」とあることからも分かるように、明治四〇年一一月三日の明治天皇の誕生日、当時の天長節を祝って詠んだ歌であり、また、『馬酔木』終刊之消息」の冒頭に、

「馬酔木」第四巻も発行僅に三冊にして、明治四十年は暮れたり

と書いていることから判断すると、左千夫は「馬酔木」を明治四十年のうちに刊行できるものと考えて編集を進めていたらしい。「馬

酔木」の第四巻は第三号で終刊するのであるが、

第一号　明治四〇年　三月　八日
第二号　明治四〇年　五月二五日
第三号　明治四一年　一月一〇日

のように発行されており、明治四〇年のうちに刊行されたのは、第一号と第二号の二冊で、第三号（終刊号）を入れないと三冊にならないからである。

先に記したように、明治四〇年一二月四日付の篠原志都児宛八六四書簡や胡桃沢勘内宛八六五書簡では、年内発行はおぼつかなくなった旨を述べながら、翌五日付の依田秋圃宛八六七書簡では、

〝本年中に出来ない様な事は万々なき事と存候

とも記し、また同月十七日付の望月光宛八七一書簡でも、

アシヒハ必す年内中ニ出来申候

と書いている。一二月の初めには印刷所に原稿を渡したものの、いつ発行できるものやら見込みのたたないところから、このような揺れが生じたものであろう。

『馬酔木』四の三には「終刊之消息」にひきつづいて「稟告」が載っている。署名はないが、左千夫の筆になるものと推定される。これによると、根岸短歌会は東京本郷区千駄木、三井甲之方の「アカネ」発行所に移し、「馬酔木」に残金のある者には「アカネ」を送る。「歌会」や「研究会」については「アカネ」創刊号に発表される、と述べ、最後に「毎月一回の十九日会は依然左千夫宅にて開く」と記している。

左千夫としては「十九日会」だけは自分のもとに残すが、根岸短歌会の機関誌「馬酔木」はそのまま「アカネ」に継承させ、その編集の事務など一切を三井甲之に託そうとしたものと認められる。

その点については、「終刊之消息」においても、

・三井甲之君主として編集に当り、脳力と経済との上に全責任を負ふて奮起せるに基づけり。

・三井甲之君新に大学を出で、新進の英気を以て、全力を挙て斯道に尽さんとの決心を有し、増田八風君大須賀乙字君等大学の同級諸君之を助け

・放縦落々毫も拘束を知らざりし、「馬酔木」編集者の手を離れ信仰的熱烈なる三井甲之君に依て新興の「アカネ」を経営せらるゝは、斯道の為めに予の衷心より慶賀措く能はざる所なり、今後諸同人の活動上予は幸に客位の地に居るを許され、年来の事業たる万葉新釈の稿を急がんとするは、予の熱烈なる希望にして又一生の責任なり

などと述べて、機関誌編集の仕事を三井甲之に譲って、雑務から解放される喜びを隠さないでいる。

右に引用した文章で「年来の事業たる万葉新釈」と述べているのは、左千夫が明治三七年発行の「馬酔木」八号から始めた万葉集の評釈の仕事で、「終刊之消息」を書くまでに既に一二回発表しており、その後も「アララギ」に一五回にわたって掲載してゆく。左千夫としては、自由になった時間に、万葉集の評釈の仕事のほかに、小説を書きたかったことは言うまでもない。

ところで、「アカネ」に増田八風、大須賀乙字らが加わることを左千夫がここで認めている。二人は「馬酔木」の歌会に何度か甲之といっしょに参加しているが、特に短歌に才能があるとは見られない人物で、甲之としては「アカネ」において、増田八風にはドイツ文学の紹介を、大須賀乙字には俳句の選などを担当させるつもりであったと考えられる。

その辺の事情について、左千夫の明治四〇年一二月五日付の依田秋圃宛八六七書簡では、

> 馬酔木善後策ニ就き只今蕨君も上京中にて相談致居候三井甲之君か万事を引受け彩雲閣にて発行せんとの協義まとまり申候内容従来の歌及歌論ニ加ふるに若手連の評論時文紹介欧州文壇の消息等を加へ六十四頁の清素なるものを出す筈に候つまり今の馬酔木を拡張したるものに候

と報告し、同じ趣旨のことを同年一二月二二日付の島木赤彦宛八七二書簡でも、

> 三井氏ノ雑誌ハ始ヨリ小生モ勧メタル程ニテ馬酔木ハ到底小生一人ニテハ出来難ケレバ君ガ新進ノ英気ヲ以テヤツテクレト云ヒシヨリ起リシコトナリ名ヲ改メネバ売レナイトノ事故ソレモヨカラント思ヒシモ是ハ一応長塚蕨ト相談ノ上ヤラセラ位ナラハ三井君ニ一任セヨトノ事ニテツマリ馬酔木ヲ革新シテ内容モ拡充シ俳句モ入レ劇評モ入レテ可成売レルヤウニセントノ三井君の考も小生等ハ任セタル以上ハ一任シテ問フ所ナカリシ位ナリ

と述べている。

左千夫一人の手でにおえなくなり、いつまでたっても刊行を見ない「馬酔木」の善後策について、一二月の初めに、左千夫、三井甲之・岡麓などによって話し合うことが決まったらしい。一二月五日に長塚節は岡麓に書簡を送って、

> 伊藤君は蕨が上京するから雑誌の相談をすると申候へども、蕨は到底歯牙に懸くるに不足、貴兄は十分貴兄の意見を表示して局を結ばれむことを望み候

と申し入れている。この節の手紙は、何事にも慎重冷静な彼が、人が良いかわりに判断に甘いところのある左千夫と蕨が甲之との交渉で軽率に事を決めるのを危惧したところからのものである。

一二月五日、左千夫は甲之に会った模様で、その後に蕨真が上京して、左千夫宅に泊まっている。

翌日の午前に左千夫は蕨真と本郷区台町の鶴栄館に三井甲之を訪ねたが不在で、神田区今川小路の岡麓宅に行くと、そこに甲之がおり、そこで左千夫・蕨真・岡麓、甲之の四人で「馬酔木」の善後策について協議をした。ここで、三井甲之が編集主任となり、二月一日に創刊号を岡麓の経営する彩雲閣から発行することが決まった。岡麓宅を出た三人は、根岸短歌会の長老格にあたる赤木格堂を九段に訪ねて報告をしている。

以上のことは、一二月二九日付の長塚節宛八七四書簡などから分かるのであるが、今まで「馬酔木」の編集にほとんど携わったことのない三井甲之にできると考えたのか。また、甲之は新しい雑誌を、短歌専門の雑誌としてではなく、小説や詩や俳句、海外文学の紹介などを載せた総合文芸雑誌として出すつもりであったと考えられるが、協議に加わった左千夫・蕨真・岡麓や、その報告を聞いた格堂は根岸短歌会の機関誌としてそれをどうして許したのであろうか。

左千夫としては、「馬酔木」編集の重圧から開放されて、小説や万葉集の評釈に没頭できる喜びの方が大きく、多少の心配はあっても、甲之に任せたいという気持だったと考えられる。今までに甲之といざこざが多少あるにはあったが、この頃は幾分は投げやりな気持もあって、編集から解放されたいという一心から任せることにしたのであろう。

岡麓にとっては、正岡子規に師事したのは自分の方が早かったのに、「馬酔木」の主宰者として今や専横の振舞いが見え、定期的な刊行もできなくなっている左千夫に代わって、三井甲之が編集をしてくれるという点を買ったものと思われる。

蕨真も「馬酔木」の編集を左千夫に任せることができなくなった今、甲之に頼るほかないという気持であったかと思われる。しかし、彼は甲之の人柄や編集の力量について、それほどの信用をしてはいなかったようで、先にも引用した左千夫の一二月二二日付の島木赤彦宛八七二書簡を見ると、

蕨君ハ編輯大体ヲ小生ガ監督シテ三井君カ主任ヲスルナラバ一切ノ損失ハ負担してもよいとの決心ニテ上京シタルモノニ候三井君カ何モカモ一切自分ノ意ノマヽニセントナラントナラハ暫ク三井ニ一任セントテ帰リタルナリサレハ三井ガヨスカ又三井君ノナス所根岸趣味ニ反スル様ナ場合ニハ蕨君ハ更ニ資力ヲ尽シテ別ニ雑誌ヲ起サントノ覚悟ヲ誓ヒテ帰国致候

とあり、左千夫が監督し、編集の実務を甲之が担当するという形にしないかぎり、甲之の性格から、根岸短歌会の機関誌から逸脱したものになることを危惧している。蕨真が心配したことは、左千夫の

同月二九日付、長塚節宛八七四書簡にも、

蕨の考てハ迚ても一年ハつゝくまいから其後ニなつて大ニ奮発する方よからん其時経費の全部を一人て負担すると云ふて帰つた

と記されており、蕨真は三井甲之が根岸短歌会の機関誌を編集することに深い危惧の念をいだいていたことが察せられる。

にもかかわらず、甲之の編集で新雑誌を出すことに決まったのは、他に編集を任せられる者がなかったためであろう。恐らく、蕨真がいだいたような危惧の念は、「馬酔木」同人なら多少はもったはずで、そのために『「馬酔木」終刊之消息』において左千夫は、三井甲之の編集になる新雑誌「アカネ」を紹介したすぐ後で、

蕨真君長病根本より癒て健康旧に加はり、益斯道に尽さんとするの決心あり、今後諸同人の活動上必要の時機に際せば何時なりとも、独力経費の一切を負担して道の為に尽すところあらんと誓はる

と、読み方によっては、既に甲之に問題があり、時期を待って「アカネ」から独立する決意を示唆するものともとれる書き方をしなければならなかったと考えられる。

「馬酔木」が廃刊に立ち至った理由に関して、永塚功氏は『伊藤左千夫の研究』(桜楓社　平成三年一〇月)において、

「馬酔木」を廃刊にすることにした原因には、左千夫と門人との関係、左千夫色に対する門人の反発、経済上の問題などがあるが、結局、左千夫の独善的な編集方針にあったとみるべきであろう。

と述べて、左千夫の独善的な編集に対して門人たちが反発し、そのために「馬酔木」が廃刊に立ち至ったと考えておられるらしい書きぶりである。

「馬酔木」を主宰した左千夫に独善的な面がなかったとは言えず、そのために、岡麓、赤木格堂、香取秀真など根岸短歌会の長老格の面々は、「馬酔木」から遠のいた位置にいたという事実がある。

そして、また、左千夫の編集による「馬酔木」の刊行がひどく遅れていて、それに対して、同人たちの間に不満が起こっていたことは確かである。明治四〇年一一月二六日、柿の村人は平福百穂に宛てて、

馬酔木遅刊小言諸方ニ聞ェ候左翁何ト思居リャ

と不満を漏らしていることや、左千夫が蕨真宛に同月二一日付八六〇書簡で、

馬酔木は如何せしと問はれ候程困しきことハ無之候斯様ニ延引致候事ハ三通四通の事情有之候今夜も原稿精書致居昨日ハ格堂来り今日は義郎来る

と言い訳しているのを見ても、いつまで待っても発刊されない「馬酔木」刊行の遅れに対して、同人たちの間に不満が高まっていたことが分かる。この書簡の中で言っている格堂が左千夫宅を訪問したというのも、根岸派の長老として、「馬酔木」刊行の遅延について事情を聞くとともに、同人たちの不満を伝えに訪れたものと考えられる。

「馬酔木」の同人たちの中に、几帳面とはいえない左千夫の性格も関係している、このような当時の機関誌の刊行の大幅な遅れに対して不満をいだく人たちが多かったことは事実である。

しかし、これをもって、左千夫の独善的な編集に対して門人たちが反発し、そのために「馬酔木」が廃刊に立ち至ったという言い方は、これは、後になって左千夫攻撃のために言った言葉（「アカネ」二巻六号「消息（六）」）をそのまま認めるもので、事実に反するところがある。それは、「馬酔木」の同人たちの間に左千夫に編集をやめさせ、他の人に代えようとした具体的な動きが認められないからである。

たとえば、甲之は明治四〇年一二月に信州に行き、島木赤彦と会って、左千夫に対する不満を述べていったという事実がある。この時、もしも赤彦が左千夫よりも甲之を信頼していたら、赤彦はここで「馬酔木」の主宰者から左千夫を下ろす動きに出たことであろうが、赤彦はそのようには動かず、甲之の言動を早速、左千夫に報じている。

また、一二月五日に左千夫・蕨真・三井甲之・岡麓の四人で協議した場合も、甲之を推したのは、左千夫であって、岡や蕨ではない。この日の協議自体も、左千夫が皆を招集し、長塚節などには手紙で知らせてから行っている。

右のような点から判断して、この日の協議は左千夫自身の、編集から解放されて小説の執筆や万葉集の評釈などの仕事に取り組みたいという願いにより、左千夫の主導のもとに行われたと見るべきであろう。門下とか、同人たちによって、左千夫が編集から下ろされたとは見ることができない。

蕨真や岡麓が甲之に編集を任せることを認めたのも、ほかに適当な後継者が当たらないところから認めざるを得なかったのだと思われる。総合文芸雑誌にするという甲之の主張に危惧を覚えつつも、左千夫をはじめ蕨真や岡麓も承認したらしい。

甲之を除く他の三人は、甲之は単なる編集者であるから、根岸短歌会の同人として、当然その伝統を尊重し、左千夫など先輩の意を承けて編集に当たるものと思っていたのに、甲之の側にはそのような気持ちはほとんどなく、編集を任されたからには、すべてが自分の自由であるという気持が強かった。そこからいろいろなごたごた

が生じたと思われる。

明治四一年二月六日、「アカネ」一巻一号、創刊号が出た。編輯兼発行者は「本郷区駒込千駄木五十番地　三井甲之助」、発行所は「根岸短歌会出版部」となっている。

草色の表紙の上の方に朱色で「アカネ」と記され、その上に「文芸雑誌」とあるのは、今までの短歌雑誌とは違うことを示している。

甲之は「消息」欄の冒頭で、「馬酔木」との関係に触れ、

> 伊藤左千夫氏主として編輯発行一切を経営し蕨真長塚節両氏地方にあって力を尽され四十一年一月発行の第四巻第三号迄発行致し候。最近に於て左千夫氏は研究創作に忙はしく雑務を処理する煩に堪へず今回新たに二三の同人を加へ広く文芸全般に亘る創作批評を掲載可致茜と改名し其一巻一号を発行致し候編輯発行の雑務主任者は同人間の都合により変じ候も同人全体協力可致殊に新進諸君の助力と文学に熱心なる一般読者諸君の賛助を希望致候

と述べている。穏当な「消息」と言えよう。

「広く文芸全般に亘る創作批評を掲載」する旨を述べているが、掲載された作品を見ると、

小説	一編
写生文	一編
随筆	一編
評論	八編
詩	一〇編
翻訳の詩	三編
長歌	六首
短歌	三〇三首
俳句	四五句

と、確かにほぼ文芸のあらゆる分野にわたっており、特に翻訳や外国文化の紹介の評論が目につく。また、旧「馬酔木」同人による短歌が三〇三首、長歌が六首というのが創刊号の中では目をひく。しかし、表紙には、三井甲之や増田八風の翻訳の詩は紹介されているが、短歌は長塚節の「晩秋雑詠」四一首、平福百穂の「釧路行」二七首など、すぐれた連作もあるのに、それが紹介されておらず、根岸短歌会から発行された雑誌とは思えない扱いである。

第二号から第五号までの内容を見て見ると、

	第二号	第三号	第四号	第五号
小説	二編			一編
翻訳の小説		一編	一編	一編
写生文	一編	一編		
随筆	一編			一編

評論	一一編	七編	八編	四編
詩	一二編	一二編	九編	四編
翻訳の詩	三編	二編	三編	一編
短歌	一五九首	二二五首	一六六首	一八六首
俳句	一九句	三一句	一七三句	八八句

のようで、この雑誌の読者には、やはり旧「馬酔木」の同人が多い。

さて、ここで再び創刊号にもどると、左千夫はこの号には、短歌「恋の籬」二二首、評論「二葉亭氏の『平凡』」を載せ、「選歌」を担当している。

次に、「アカネ」の創刊号を旧「馬酔木」同人たちがどう見たかをさぐってみたい。まず、二月七日付の蕨真宛九〇六書簡で左千夫は、

> アカネも出来候岡君の小説思ひしよりもよろしく嬉しく候短歌は平福君のを第一と致候新体詩は一も感服出来不申候そは兎に角この調子ニ而ハ売れるという点に如何にや覚束なく候此際は内容の事ハ第二第三として売れてほしく候売れなくて然かも内容ニも振はす候ては考ものと存候

と述べており、「アカネ」の中で彼が注意を向けていたのが、もっぱら「馬酔木」にも掲載されていたジャンル、短歌と小説、詩であったこと、甲之の作品には低い評価しか与えていないことなどが分かる。左千夫は二月二〇日付の胡桃沢勘内宛九〇九書簡で、

> 「アカネ」の歌は只平福堀内柳沢の歌に醇真の感が多い他の歌は拵物の感じがするもの許だ（中略）三井のもだめ長塚大だめ也技巧を弄ふの愚を覚らすんば醇真な歌は出来ない

と、もっぱら短歌のみについて感想をもらしている。ここでも、三井甲之の歌をまったく評価していない。

二月一九日には、例の「十九日会」が左千夫宅で催されたが、二月二〇日付の胡桃沢勘内宛九〇九書簡を見ると、最後に、

> 昨日十九日会意外盛であった

とある。二一日付の島木赤彦宛九一〇書簡には、これも最後に、

> 十九日に蕨君上京子規子七回忌の紀念として例の歌集出版の事を決定致候立派なものを作るつもりに候

とあり、蕨真も上京、根岸派の歌人が比較的に多く集まったらしいことがわかる。ここで、新雑誌「アカネ」のことを話し合うとともに、「馬酔木」時代を記念して、子規の七回忌を記念する歌集の編纂も決まったのであろう。しかし、この決定は三井甲之とは連絡、相談なしに行われていることが注目される。

この頃の、左千夫と甲之との関係を見てみると、甲之は創刊号で、多忙な左千夫に代わって編集の雑務を担当するという殊勝な「消息」を記していたが、実際には前からのごたごたが後を引いていたよう

である。左千夫の二月一一日付の篠原志都児宛九〇八書簡は志都児の所へ「アカネ」創刊号が届かなかった苦情を志都児が左千夫に伝えてきたので、二月一〇日の「アカネ」歌会の席で左千夫が甲之に苦言を言ってやり、雑誌は左千夫のところから一冊送ったという報告である。その報告の後には、

今後三井の方より送らねは僕から送る君の正直を知るものは少ない君は自分の如く人も正直だと思つて僕に対する如く外の人に物を云ふてはいけない三井などハ甲州人だから多少陰険な性質もある今後其積で交らねハいけない

と、行き違いが生じているらしい文面がある。

左千夫は志都児に対して、二月二三日付九一二書簡では、

三井といふ男厄介な男に候小生も実ハ殆といやに相成居候へとも暫く吾根岸歌の為めに忍ひ居候君の歌ハ小生へ送被下度小生より選歌として送稿可致候根岸短歌会の名でやる以上は三井の一存ニはさせ不申候君も又三井といふ個人と反感したりとて根岸歌会と離るへき理由は万々無之候

と述べている。志都児は三井甲之のところへ創刊号の原稿として送ったのに、ボツにされて掲載を見なかったものが相当あったらしい。左千夫の手紙は、それを繰り返さないために、今後は原稿を左千夫のもとに送れ。左千夫の選を経た歌として「選歌」欄に掲載させ、三井の一存にはさせないというもので、志都児は甲之のやり方に憤って、根岸短歌会からの脱退も考えている様子である。

このことに関しては、斎藤茂吉が『アララギ二十五年史』において、

私は過去を追懐して当時の事を例を以て云ふなら、例へば私がアカネ発行所へ行つて居た。そのとき三井甲之は集まつて来た歌稿を整理して居た。甲之がたまたま篠原志都児の歌稿に出会つた。而して突如として、『あ、こいつあ左千夫の弟子だ！』。かくの如くに甲之が云ひながら碌に志都児の歌稿に目も通さないで片づけたといふ風であつた。かういふ風では決して円満に一冊の雑誌をも発行し得るものではない。（中略）左千夫対アカネの状態がそんな具合であつたから、そのことが却つて予定よりも早期にアララギの発行を促進せしめたと看做していいのかも知れない。

と証言している。

「アカネ」一巻二号は三月一日に発行された。この号に左千夫は短歌「無一塵庵歌帖」二〇首、随筆「子規子」を載せている。

甲之は、この号の評論「空想文学を排して日本派の将来を論ず」で、

吾々は現時の有様が正岡子規氏の文学の当然発展すべき路を歩

み居るかと顧みる時、吾々の信ずる所を披瀝すべくば只否と答ふるのみである。

と述べて、旧「馬酔木」の行き方を是認できないと、旗幟を鮮明にしている。この立場から、これから左千夫などの作品に次々と攻撃を加えるようになるのである。

一方の左千夫は、三月八日付の堀内卓宛九一八書簡で、

アカネ二号をどう見るかとの御たつね小生も大抵君と同感に候三井甲之は頗る陰険なる男にて小生の考なとは到底彼と一致しかたく候初めはよい加減なことを申居り今日にては蔭ニ而小生の悪口なと盛に申居候由小生も漸くいやニ相成候歌もあれてハつまらなく新体詩なとは一つも物になつたのは無之候短歌も十分の一もとれ不申候

と、堀内が信州出身で「比牟呂」の仲間であるところから、腹蔵なく「アカネ」に失望するだけでなく、甲之の人格を疑うことまで述べている。「三井は殆と根岸短歌会の歴史なと無視致居候彼の行動余り増長致候へば根岸歌会の名は取消させ可申候」と、既にこの時期に甲之を根岸短歌会から絶縁し、「馬酔木」を再興する必要を感じはじめている。それとともに、この頃から、左千夫の手紙には、甲之および「アカネ」に関する批判が多くなってゆく。

四月一日に「アカネ」一巻三号が発行になる。この号に左千夫は短歌「赤木格堂が外遊を送る」十首と新体詩「春の歌」一編を載せている。しかし、左千夫は四月一九日、岡千里に対して九三五書簡で、

「アカネ」は馬酔木の後継なれど編輯者が違へは従て種々な点ニ相異を来し候三井は小生などの事を蔭にて盛んに悪口申居候由小生も自然に遠り居候次第に候訳文なとハ学生のする事にてつまらぬものに候歌論も俳論も余り感服出来不申候小生ハ只歌たけ出し居るつもりに候

と書いて、「アカネ」と距離を置く姿勢を明らかにしている。

また、四月二八日付の堀内卓宛九三二書簡には、

アカネへ貴詠及び中村君の歌を送り稿末ニ小生選と附記しやり候処それが癪にさはり候とかニて出し不申候小生はアカネの為にせんとするも向ふにては妙にくねられ候故如何とも致方なく候今世の人ことに新き学問をした人の精神は六つかしく候キヌタと申雑誌へ歌を出し可申候

とある。先に胡桃沢勘内の作品を左千夫と関係のある者の作品だというので意識的にボツにしたということがあったが、卓や中村憲吉の場合も同様な理由で載せられなかったらしい。

このような経緯があって、左千夫はこの号を最後に作品を「アカネ」には発表しなくなり、次の五月一日発行の「アカネ」一巻四号

では課題「恋」の選歌を担当しただけで、作品は見られない。

「アカネ」一巻四号には甲之の筆になる「評論」があって、その中で彼は、「恋愛と肉慾―「芋掘」と「隣の嫁」―」と題して

この二篇の恋は肉より余り遠くない、発達しない、幼稚な、浅薄な、一時的なものとしかとれぬ。

と批判した。左千夫の「隣の嫁」はこの年、四一年一月発行の「ホトトギス」に掲載された作品である。節の「芋掘り」は三月の「ホトトギス」に載ったものである。

この二つの作品について島木赤彦は三月十六日付の長塚節宛書簡で、

左翁のハ田舎の生活が写され居り貴兄のハ田舎の気質が表ハれ居る事面白き比較と存じ候（中略）三井君の小説ハ小生等には分らぬ小説に候

と書き送っている。今日から見ても佳作といってよい「隣の嫁」や「芋掘り」を口を極めて非難する甲之の鑑賞眼に問題がありそうである。

甲之はまた、一巻四号の「消息」欄では、

新時代の小説を作らむには必ず相当の修養必要と存侯。ホトトギス四月号の左千夫氏の春の潮の如き作に接しては一層此感を強く致し候

と記して、名指しの攻撃を加えている。

この攻撃に対して、今までにも甲之と対立し、批判を受けたことの多かった左千夫の衝撃はそれほどでもなかったが、長塚節の衝撃は大きかったようで、それを慰めるために、節に宛てた五月七日付の九四一書簡で左千夫は、

さすかに君も黙しかねたるか僕は一言も云はすに過した人より罵詈せられた時沈黙を以てこれに対し得れは愉快に候攻撃も沈黙を如何ともする能はすと存候要するに三井の評言に誠意を認め難く候誠意なき評言なとに気をもむなとハ愚と存候君か悪口を云はれたのハ君か三井の小説を褒めないからに極まつて居る馬鹿気切つた話ならすや

と、節に甲之の攻撃に今は黙って耐え、動揺しないように言う。また、五月一三日付の九四八書簡では、

君も三井なとをいつまで相手にするか相手にすれハ相手になるほと悪罵に進む百首の歌もないに和歌入門なと丶ハ何の事だ誠意なき態度ハ根本の問題である云ふ所に多少の理窟かあつても駄目でハないか肉欲なと丶云ふても彼ハ肉欲の意義すら解して居らぬのだ

と、さらに節を慰め、甲之を相手にしないように呼びかけている。

このように長塚節も三井甲之とごたごたがあったが、節の「アカ

ネ」への投稿は七月一日発行の一巻六号と比較的に遅くまでつづいている。左千夫とちがって節は甲之に対してはっきり対決の姿勢をとることが性格的にできなかったからであろう。

もう一人の旧「馬酔木」の主要歌人である、島木赤彦の場合を見てみると、明治四一年四月二三日付の、作歌を始めたばかりの唐沢うし子宛の書簡では、適当な短歌の入門書を尋ねられた答えとして、「雑誌にては『アカネ』(根岸短歌会の機関誌)」と書いて、購読と出詠を勧めているが、それから間もない五月四日の望月光宛の書簡になると、

「アカネ」の歌不振不愉快なり下手な議論ばかりしてゐるからいかぬのだ小説評など見当違也

と立腹しており、同じ望月光に宛てた翌四二年六月一〇日付の書簡では、

アカネ今度の評論見る気せず中途で止め申候三井君は神経過敏の詩人に非ずして神経過敏の経営家に候文学士なる名称が誤つて彼を事業家にせし事彼は自覚して居らず悲しむべく候

とさえ言っている。赤彦の「アカネ」への投稿は四一年五月発行の一巻四号を最後に見られなくなる。

このように左千夫や赤彦が、「アカネ」への投稿を、四一年五月発行の一巻四号で取り止めたのをはじめ、節は七月一日発行の一巻六号で取り止めているのを見たが、この前後から旧「馬酔木」同人のほとんどが出詠を中止し、以後はわずかに事情にうとい一部の地方在住の旧同人が投稿をつづけるだけとなる。

このように旧「馬酔木」の同人たちの作品が「アカネ」に載らなくなったのには、この雑誌に見切りつけて出詠を取り止めたという場合のほかに、胡桃沢勘内や堀内卓の原稿の場合のように、左千夫の目をかけている門下ということで甲之が意識的に排除した場合があったことは、先に見たとおりである。

こういう旧「馬酔木」の同人たちと「アカネ」の甲之との対立の中で、長野県を旅していた左千夫は、善光寺から三井甲之に宛てて「寺中生」という匿名で、

拝啓筆硯益御健勝奉賀候、馬酔木も当地へ三四冊参り居候、アカネも其位参り居候。さて此頃のアカネはいやに相成候甲之先生は人に教ふる態度や宗匠的態度はイケナイイケナイと言ひながら和歌入門などゝは何事に候や、吾々は不幸にして甲之先生の歌は百首とは見不申候それで早く宗匠ヅラは何事に候や、口に信仰など立派な事を言ふて町人根性と存候。御弁解あらば伺度候

と投書する。日頃の鬱憤が、旅に出て抑えられなくなったものであろう。左千夫のこの時の旅は、新潟県刈羽郡南鯖石村の出身で、愛

人の岡村チカに逢おうとして赴いたもので、その精神的な興奮や動揺も匿名の投書と関係があるかと思われる。

いずれにせよ、この時期においては、左千夫の甲之に対する感情は全く敵対の関係になっていたと言えよう。

この匿名の投書は、明治四二年六月一日発行の「アカネ」二巻五号掲載の、甲之の筆になる「歌壇漫言」の中の「●伊藤佐千夫氏に答ふ」という小見出しのある文章の中で、

　予は昨四十一年五月十二日新潟発汽車便の消印のある葉書を受取つた。それには信州善光寺寺中生とあるけれども匿名である。

　其全文は

として掲載された。旧「馬酔木」同人たちの手によって「アララギ」が刊行され、「アカネ」との対立がさらに激化する中で、甲之は左千夫攻撃の手段として、この匿名の投書事件を暴露したものである。

それでは、左千夫をはじめとする旧「馬酔木」同人たちが、「アカネ」とは別の雑誌の発行を考えるようになったのはいつごろであろうか。

左千夫は明治四一年五月二九日付の長塚節宛九六四書簡では、

　別に雑誌を出すなどは暫く近からぬ将来にあることなるべく候。機関雑誌がなければ直に活動を失ふ様では到底弥二馬に過ざる同志と存候。何人の目にも雑誌発行必要と思はる丶時機に際せば又何時にても発行可致候。此際吾々は悠々として創作に従事致度ものに候。

と述べて、「アカネ」とは絶縁した気持ちではいるが、ただちに別の雑誌を出そうとする気のないことを明らかにしている。

しかし、この書簡には、『子規子七年忌記念歌集』の刊行が左千夫を中心に考えられ、博文館、俳書堂、忠文館などの書店と交渉していることが書かれている。節も既にこの話は聞いているらしく、ほかに蕨真や森田義郎らも、この計画に加わっている趣である。六月一〇日付の長塚節宛九七四書簡で、左千夫は書名について『根岸短歌会歌集』と考えており、二、三の人の同意を得ていることを報じている。

七月一一日付の望月光宛九九〇書簡を見ると、

　子規子七回忌紀念歌集選を始め候処歌数多く容易のことにあらす「アカネ」ハ此歌集の予告を拒み候

とあって、旧「馬酔木」の同人たちから『子規七周忌記念歌集』のための歌稿が左千夫のもとに既に寄せられていること、また、その歌集刊行の予告を甲之か拒絶したことがわかる。

甲之は、この時は『子規七周忌記念歌集』の予告を断ったらしいが、八月一日発行の「アカネ」一の七の「消息」欄では、近く忠文舎という書店から刊行されることを記し、期待を述べている。

六月一一日付の蕨真宛の九七五書簡によって、左千夫や森田義郎などの間で、旧「馬酔木」同人たちを集めた根岸短歌会の相談会という会合をもち、「アカネ」の甲之に対して警告の決議を行うことが計画されたことが分かるが、これも、旧「馬酔木」同人たちの、「アカネ」に対する対立の意識の高まりを示すものといえよう。しかし、この決議は結局は行われなかった模様である。

蕨真が「アカネ」に対する不満から、自分で新しい短歌雑誌を発行しようとしたらしいことは、四一年八月一九日付の長塚節宛一〇〇六書簡などから窺える。左千夫は節に宛てて、

> 此月始に蕨か来て上総から雑誌を出すと相談かあつた、これは僕の主動ではない併し勢助力せねはならぬは勿論だか僕かアカネなとゝ対抗の下心かあつてやるのぢやないかなとゝ誤解されては困る、其積で君も応分の助力ハしてやり給へ近来余りにアカネの歌がつまらないから蕨か雑誌を出すのも幾分我同志の為になる

と蕨真の計画を知らせるとともに、助力を要請している。左千夫は同じ日付で島木赤彦彦に対しても、同じ趣旨の手紙を出しているが、その中で、蕨を助けるる理由として、信州で赤彦らが中心になって「比牟呂」を出しているが、そこには信州の同人たちがいるのに対して、上総から雑誌を出すにあたっては上総同人というべき者がいないので、旧「馬酔木」の者で助けなければならないと言っているのが注目される。

それと、もう一つ、

> どうせ又東京から雑誌を出さねはならぬ時期は来るに極つて居候へとも文学は百世かけての仕事に候一時の出来事然たる熱に動かさるへきものにあらすと存候

と述べており、蕨真の雑誌に協力はするが、「アカネ」に対抗するために自分が今すぐ立ち上がる気持ちのないことを断っていることが目につく。

蕨真が新しい雑誌の刊行について相談のために上京して、左千夫宅を訪問したのは八月の初めで、そこで雑誌の名が「アララギ」と決まり、当分は二か月に一度発行ということになった。そのことは、八月一九日付の島木赤彦宛一〇〇五書簡、望月光宛一〇〇七書簡、篠原円太宛一〇〇八書簡などから判明する。

八月二〇日付の蕨真宛一〇一二番のはがきによって、左千夫が青山北町に、画家で歌人の平福百穂を訪問、新しい雑誌「アララギ」の表紙を依頼し、一応案がまとまったらしいことが分かる。しかし、蕨真と相談の結果であろうが、後に中村不折に変更されている。

九月六日付の蕨真宛一〇一七書簡によれば、「アララギ」創刊号のための原稿がよほど集まってきている模様である。蕨真が雑誌を

出すといっても、「馬酔木」の旧同人たちから原稿を集めることなどは、長年のつながりをもっている左千夫がすることになったらしい。同月一三日付の長塚節宛一〇二三書簡には、

アラヽギの原稿ハ甚盛なり重なる同人殆と顔揃に而作物も不思義と思ふ程に振へり此盛観を田舎より発表するは残念と思ふ程なり

と、原稿が既に集まったことを知らせている。

左千夫のところに原稿が集められたとはいっても、編集や印刷所との交渉などは蕨真の方で行ったらしく、左千夫は赤彦など主な同人の歌は雑誌の前の方に載せるように忠告をしている。

こうして「阿羅々木」の創刊号が出たのは一〇月一三日で、編輯兼発行人は蕨真、発行所は蕨真方の千葉県山武郡埴岡村埴谷の埴岡短歌会となっている。「稟告」を見ると「本誌は当分の内、一ケ年に六回或は七回発行の予定に有之候」とあり、創刊号には、蕨真・左千夫・節・赤彦・茂吉・千樫・勘内ほか、計二五名が作品を寄せている。そのほとんどが旧「馬酔木」同人である。左千夫はこの号には短歌「心の動」三〇首と「東都来信」とを載せている。

左千夫は一〇月一九日、二〇日の両日、「阿羅々木」に作品を寄せた同人たちに感想を書いて送っているが、それを見ると、「諸同人たちの歌は実ニ振つてゐるのが愉快に候」（島木赤彦宛）、「アララギ届き候事と存候思ひしよりハ諸同人たちの作歌振ひ居何より嬉しく候」（胡桃沢勘内宛）などと同人たちの作歌に満足を示しつつも、「アラヽギは真の山人の編輯故愚な事も多からんと存候御見のがし願上候」と蕨真の編集にもどかしさを漏らしている。

一〇月一日発行の「ホトトギス」一二巻一号の「消息」欄で虚子は「阿羅々木」の発行を紹介したあとで、

伊藤、蕨二氏等が主として出て居りし馬酔木の後身が今日のアカネなるに尚蕨氏の手によりて別にアララギの出でけるは何故にや、アカネとの関係は如何になるや、消息を伝ふる以上は勢ひ此の辺の事も伝へたけれども、其は更に知らざる故率直に其儘を附記し置きたる也

と根岸派から「アカネ」と「阿羅々木」と二つの雑誌が出ることになった点にまわりくどい形で疑問を表明している。かれは、根岸派が二つに分かれて抗争しようとするのを憂慮してこんな言葉を発したもので、この後、いろいろな人物に和解を勧めている。

一一月一日、「アカネ」一巻一〇号が発行されるが、三井甲之は「歌壇漫言」欄で「阿羅々木」の創刊を紹介し、「歌が全体に即興的のものが多くて人生に直接な心から沸いた切実なものが殆んど無い」と批判している。

「阿羅々木」一巻二号は明治四十二年一月一日に発行される。こ

の号に左千夫は、短歌「採草余香」二六首、手紙「東京より」、随筆「碧梧桐氏に答へる」を載せたほかに選歌を担当している。この号について左千夫は、一月三日と推定される蕨真宛の一〇八五番の年賀状で、

賀正　アラ、キ届申候総て上々吉の出来大に嬉しく多大なる御労を謝申候委細は拝読之上　早々

とほめている。蕨真による「阿羅々木」の編集が、左千夫の助言が効を奏して、かなりうまく行われたことを言ったものであろう。

「阿羅々木」一巻三号は四月三〇日に発行された。これより前、左千夫は蕨真宛に三月八日付一一一六書簡で、「貴稿只今とゝき申候選歌は早速御送り可申候」と述べ、翌日には、「アラ、キ原稿全部を見了只今御送り致候」と左千夫としてはかなり迅速に仕事を処理し、三月中にでも発行できそうな模様であった。三月二六日付の篠原志都児宛一一二五書簡で左千夫は、「アラ、キは来月十日頃との報あり」と知らせている。にもかかわらず、発行日は四月三〇日、実際の発送は五月五日ごろになった。左千夫が蕨真に四月四日の一一三〇番の葉書で、「アラ、キ何日頃に出来候や人々待ちこかれ居り候」と尋ねているのをみると、蕨真の方に何か問題があったらしい。

創刊に際しては、先にも記したとおり、「稟告」で、年に六、七回発行すると言っていたが、このような状態で、それは不可能と判断したのであろう、蕨真は、この三号の「稟告」に、「本誌は春夏秋冬の四回発行と更め候」と記している。

左千夫はこの号には短歌「非行録」二一首、「還暦祝歌」三首、随筆「歌人閑語」、「万葉集新釈」、「東京より」を載せたほか、選歌も担当している。

三井甲之の「阿羅々木」批判、左千夫攻撃は、その後も熾烈に続けられた。五月一日発行の「アカネ」二巻四号でも、甲之は「歌壇漫言」で左千夫の歌を明星調、修辞が混乱、川柳のようだなどと攻撃している。

すこし前のことになるが、三井甲之は四一年一二月二四日付の長塚節宛書簡で、

アカネ新年号にては左千夫のアララギ巻頭の文の月並みなるを論じ申候今後いよいよ激烈になり可申小生は文学者などゝ世人にもてはやされ度もなく俗な栄華も欲しからず悪人征伐を以て自己の天職と信じ猛進可仕悪人一人居ればよしそれが跳梁すると天才が死ぬ故天才のため之を折伏致度候

と述べており、左千夫は根岸派の中でのさばって、節などの才能ある者を抑えている悪人である。この悪人征伐、折伏が自分の任務であると、左千夫への攻撃は熾烈を極める。

六月一日発行の「アカネ」二巻五号の「歌壇漫言」になると、甲之の攻撃はさらに強まって、上下二段一二ページにわたって、左千夫を中心に、蕨真、斎藤茂吉に攻撃を加えている。先に紹介した、左千夫が明治四一年五月に、寺中生の名で匿名の投書を「アカネ」に送ったことを暴露したのも、この「歌壇漫言」の冒頭である。この号では、さらに「消息」欄でも左千夫を攻撃、

> 過去は勿論今後も小生等の行動は左千夫氏等とは無関係に候。故に今後は左千夫氏等に於ても、小生などを何等か自己と関係あるものゝ如く思はれざるを希望致し候。

と、誌上ではっきりと絶縁を宣言している。

ところが、六月一八日付の岡千里宛一二六〇左千夫書簡を見ると、状況が一変する。その書簡には、

> アカネの言につき懇なる御詞難有存候　小生も最早一言も申間敷存居候処三四日前三井氏突来訪いろいろなことを書いて済ませぬ云々と有之且つ「アカネ」も七月限りで廃めるとの話に候今更惜しき心地致候若い人々のすることは更に分かり不申候

とあって、六月一四日前後に、甲之が左千夫のところへ来たことが分かる。このように甲之が左千夫宅を訪れたのには蕨真がからんでいた模様で、左千夫などの書簡や甲之の筆になる「アカネ」二巻六号の「消息」などからその辺の経緯を探ると、六月一三日、千葉県山武郡の成東を訪れた甲之は、蕨真およびいとこの蕨桐軒と相談の結果、「阿羅々木」「アカネ」を共に休刊とし、かわりに根岸派の歌集を隔月に刊行する案がまとまり、翌一四日に甲之はその案の了承を求めて成東からの帰途に左千夫の家に立ち寄ったものらしい。

その辺の経緯は、甲之自身が一四日付長塚節宛書簡で、

> 蕨真桐軒二氏より小生に成東まで来いと申し行き候にアラヽギは廃刊し云々の話有之小生も亦こゝに於て蕨真氏其他の意向も多少変じ居候やうにつきアカネも中止し
>
> 左千夫蕨真節甲之
>
> 右四人を編輯人と新たに定め
>
> 隔月に歌集を発行し度存じ相談一決左千夫先生とも相談ずみと相成申候経営の方は蕨真氏と小生にて引受け選歌を上記四人にてなすつもりに候

と報じている。

甲之を成東へ呼んだ事情については、桐軒が、六月二二日付の長塚節宛の書簡で説明している。それは

> 御問合せの三井君との会合の動機は極めて単純なるものに有之候実は小生より三井君へ成東あたりまで御来遊は如何に候やとの文意にてはがき認め居り候処不謀礎山兄来訪有之候故三井君へこむな葉書を書きましたと申候に礎山筆をとりてはがきの余

白へ歌を一首かきつけ直に投函いたし候経日三日三井君よりの返辞に来む十三日（本月十三日）成東行成東館まで出遊可仕との旨に有之候まゝ礎山兄にはかりて弐人で当日早朝成東館に出張待居候処三井君予定の時刻に着いたし候故同館弐階の一隅を占領相互に久濶を謝し談は直入にアカネーアララギとの対話と相成申候

というもので、桐軒や蕨真だけでなく、甲之の方にも、この辺で矛を収めようという気持が生じていたことが分かる。

この和解案には反対する者が少なくなかったようで、島木赤彦は蕨真宛に

愚！
愚！
愚！

六月十九日

と大書した葉書を送っている。

なぜ赤彦がこれまでに反対したかについては、六月二九日付の長塚節宛書簡に、

三井君もあれほどの意気で始めたら今少し辛棒しさうなものなれども同君近来の作物にてハ誰も感心せず議論も千篇一律徒らに文学の危機を叫び候事永続の内容無かりし事と存じ候

と書いており、大声で危機を叫び、罵倒するばかりで、自身に人に訴える作品がほとんどない甲之の「アカネ」と合併して、彼の選をまた受けるようなことになるのを強く警戒したものと考えられる。

左千夫の篠原志都児宛の六月二〇日付一一六二書簡を見ると、

「アカネ」ハ七月号にて廃刊の由「アララギ」も少しダレ居り候蕨と三井とハ何か善後の法方ニ就き相談したの話に候只々私心のみに駆られて事をする連中の了簡ハいつ変るか分り不申候斎藤君ハ後来必ず同志の為に雑誌発行する様に申居候

とあり、斎藤茂吉が反対の急先鋒であったらしいことが分かる。

茂吉をはじめとする東京在住の、主として若い同人たちは、和解案に不満を持ち、同月二七日に改めてこの問題について協議する。

二七日には左千夫・茂吉・里静・古泉千樫の四人の「阿羅々木」の在京同人たちの席に、蕨真の代理として蕨橿堂が上京して加わり、この五人と「アカネ」側の甲之とが、二誌の合併合同について話し合ったものであるが、この話し合いは決裂し、「アララギ」を東京から発行してゆくことが決まるのである。

両誌の合併に最も強く反対したのは茂吉だったようで、彼は七月二日付の千樫宛書簡で、

あの日の翌日蕨氏宛に又自分の思った事だけ簡単に書きおくり候処、少々感情を害された様に見受け候につきこの事に就きて

は全然沈黙を守る旨書き送り申候

と、蕨真が甲之と和解し、両誌を合同させようとしたことに抗議の手紙を送ったことを報じた後で、

余は左千夫門人で足れり、根岸短歌会同人などでなくともよし、（中略）桐軒氏は余の考は偏僻だ、と申し、アカネでさへも合同するに至りたるこの際云々と申され候が、アタリサワラズの人間は幸なるかなと存じ候

と、断固として和解を拒否し、八日付の同じく千樫宛書簡では、

僕は何時でもよい甲之と鉄拳を闘はす

とどこまでも対決してゆく姿勢を見せている。

これらの手紙を眺めると、「アカネ」との和解を考えた蕨真・櫃堂・桐軒らと、これに強く反対する斎藤茂吉・島木赤彦らとの間に、「阿羅々木」同人の中で大きな分裂があったことが分かる。

左千夫は六月一四日に、甲之から蕨真と甲之との話し合いの報告を聞いて、発行人である蕨真がその気持ならと、一旦は合同に同意を示したが、六月二七日の協議では、茂吉らの強硬な態度の影響もあって、一四日の了承を取り消すことになったものと考えられる。

この二誌合同についての協議について甲之は、「アカネ」二巻六号の「消息」欄で次のように述べている。

小生は最近の左千夫氏等の批評や創作のつまらぬものたるは数回論ぜし如く目下左千夫氏などの専横のために隠れ居る先輩諸氏の奮起と離脱せる同人の大合併を促し以て左千夫氏等にも多少反省を促さむとの計画なりしに左千夫氏等が今回の事に関し東京在住の先輩としても麓不空秀真諸氏のあることをも顧みず（中略）左千夫氏以下千樫茂吉氏等に今回の事を相談せざるは云々とか経営の方法を云々するとか小生は俗の事に意外の感に打たれ真面目の相談は無益と思ひ出鱈目を言ひ雑談をなして一人先に帰り候

と、ここでも左千夫が岡麓・香取秀真らの先輩たちと相談することなく、斎藤茂吉・古泉千樫の意見に従ったことを攻撃しているが、それまでに甲之が左千夫や節をはじめとする、旧「馬酔木」同人たちに加えた悪口の数々が、今や「阿羅々木」で活躍を始めた若い茂吉や千樫たちを激昂させ、もはや合併を不可能なところまで追いやってしまっていたものと考えられる。

なお、蕨真や甲之がどうして合同を考えるに至ったかというと、蕨真や桐軒の場合は、正岡子規の門下を標榜する者同志がいがみ合う事態に嫌気がさしたのであろう。これには、高浜虚子などから和解をしばしば勧告されていたことも手伝っていると考えられる。それと、田舎に住む者の人の良さとでもいった心から、いがみ合いを一日も早く終わらせたく思って、桐軒が蕨真に勧めて、成東に甲之

を呼んで和解を申し入れたものと考えられる。

これに対して、甲之の場合は、あれだけ攻撃を強めていた者が急に和解に応じたのは不思議とも思われるが、甲之も明治四二年の一月下旬に菓子折りを持って、和解のために左千夫宅を訪れたことがあり、その時は左千夫不在で実を結ばなかったということもあったのである。前年から旧「馬酔木」の同人たちが次々と脱退したために「アカネ」の経営が困難になっていたことが大きな理由かと推測される。東京における左千夫門下、信州における島木赤彦を中心とする「比牟呂」同人たち、そして長塚節が抜けた後には、「アカネ」にはめぼしい歌人が見当たらなくなっており、歌人が定期購読者の多くを占めていただけに雑誌の経営は極めて苦しくなっていたはずである。

一方、激しやすいけれども人の良い左千夫は、成東での話し合いの結果を甲之から聞き、虚子あたりから度々和解を勧められていたこともあって、発行人の蕨真がその意向ならと一四日にはそれを一旦は了承したが、後でそれを取り消す。これは今や「阿羅々木」に育ちつつあった若い世代の同人たちが力を持つに至り、彼に和解を許さなくなっていたと考えられる。

七月一一日には東京立川で蕨真・石川純・堀内卓ら「阿羅々木」の同人たちが歌会を開き、その席で今後は雑誌を東京から発行することを決めている。左千夫は、前日に三兄岩沢久吉の妻のふさが急逝したために欠席、一三日に左千夫宅を訪れた在京同人たちや蕨真から一一日の会合での相談の結果を聞き、これを了承する。九月一日に東京から「アララギ」として二巻一号を発行することになり、編集は輪番制、最初は石原純の担当で九月一日発行と決まった。その辺について左千夫は、島木赤彦宛七月二三日付一一七七書簡で、

アラヽキの改革は蕨真が毎月十円つゝ出金不足分は在京同人六人にて分担の約に候されはハ売れなくても必す続行の決心也一冊四十八頁位編輯は各員順番にやる筈歌ハ左千夫選勿論選外あること元のアラヽキの如に候

と報告している。その席で、「比牟呂」との合併の話も出た模様である。

東京発行の「アララギ」二巻一号は、題名をカタカナに改めて、予定どおり九月一日に発行された。編輯兼発行人は東京本所区茅場町の伊藤幸次郎（左千夫）、発行所はアララギ発行所となっている。編集を担当した石原純は「東京にて」において、

従来のアラ、ギは蕨真君の独力経営に成り居り候ものなれども、東京に於て活動せんが為めに一切の責任を編輯同人に於て分担することゝ相成候、尤も経済上の点に関しては今日の事情尚多くの補助を同君に仰がざるべからず候へ共、之れとても成るべ

くは其幾分は各人に於て負担して雑誌の基礎を安定に保続したく編輯に就ては毎月十日を期して編輯会を開き万事を定むることと致し候

と述べており、先の左千夫の赤彦宛書簡やこの「東京にて」から、新しく東京から出す「アララギ」は、左千夫や蕨真という個人にばかり頼ることなく、在京同人たちの協力、いわば集団指導体制によって刊行してゆこうとしていることが分かる。歌については左千夫の指導、金銭面では蕨真の助力をまだ必要とするが、これからは若い同人たちの協力で「アララギ」を発行していこうとしている。これは、「馬酔木」や蕨真の出した「阿羅々木」時代には見られないところで、このようにして「アララギ」は、九月は石原純の編集、一〇月は左千夫、一一月は山本董鍬、一二月は古泉千樫の編集というように輪番で毎月発行されてゆく。東京からのこの雑誌は、信州の「比牟呂」が「アララギ」の東京発行を機に合併したことと、「アカネ」が七月一日発行の二巻六号を最後として休刊したことも手伝って、ここに一応の安定を見るに至るのである。

休刊した「アカネ」は、明治四四年五月になって再刊されるが、これはタブロイド版八ページで、短歌の比重がさらに減っている。そして、これは翌年の三月の三巻一一号を最後に「人生と表現」と改題されて、「アカネ」の名は消える。

一方、左千夫は大正二年七月三〇日に脳溢血のため急逝したので、「アカネ」と「アララギ」とに訣別した甲之と左千夫の関係は、永遠に解けることのない対立に終わった。

このように、最後は深い対立に終わったが、しかし、ここで左千夫の甲之との出会いが左千夫に与えた影響について考えてみたい。

もともと宗教的心情があつく、「新仏教同志会」に加わっていた左千夫は、求道学舎を開いて親鸞の教えを説いていた近角常観の感化を受けた三井甲之と出会うと、彼の勧めで常観の説教を聞き、「求道」を講読、同誌にたびたび短歌を寄せて、熱心な親鸞の信者となってゆく。趣味と信仰について語る「十九日会」を毎月開催するようになったのは甲之の影響である。また、左千夫が「馬酔木」に載せた「趣味と信仰」（明三八・九）、「信仰と趣味」（明三九・一〇）と題する文章は、それより前、明治三八年四月の「馬酔木」に甲之が発表した「●雑言録　宗教と文学」の影響が濃厚である。そして、左千夫の親鸞の他力信仰は、短歌の上にも「釈尊降誕祭讃美歌十一首」（明四〇・五）・「ほろびの光」五首（大元・一一）などに明瞭に見ることができる。

このように甲之から左千夫が受けた影響は、きわめて大きいのであるが、このことについては稿を改めて考察することにする。